

福祉の主体者 —— それは障害をもつあなたです！

# かざぐるま



211

2012. 10

目次

風：自閉症の文化に触れる（河合高鋭） .....	2
川崎市子どもの権利に関する実態・意識調査の概要 .....	3
地域訓練会の現状と課題、今後の方向性（土山由巳） .....	4
児相一時保護所は揺籃としての確立を！（岡本忠之） .....	6
宮前ドルフィンと仲間たち ～障害者スポーツ水泳～（稗田律子） .....	8
わが子の巣立ちを見守って ㊸ 幸せな子に（上原ひさ乃） .....	10
本：『平和をつくった世界の20人』 『思春期の精神科面接ライブ』 .....	12

# 風

## 自閉症の文化に触れる

河合 高鋭

(和泉短期大学)

この夏に念願叶いノースカロライナへ行くことができました。

ノースカロライナでは、TEACCH 部や GHA (自閉症グループホーム会社) へ視察に行ってきました。その GHA での話になります。

強度行動障がいの人のお話でした。その人は、部屋の壁に落書きをするということでした。そこで GHA のスタッフは、落書きをしてもいいよう部屋の壁一面を黒板にしまったとのことでした。ベッドのフレームやおもちゃ箱も黒板に作り直したと…。さらにこう話します。「壁への激しい落書きは、彼の中から出てくるニーズなんだと、そうわたしたちは捉えます」

あぁ、GHA のスタッフはこの「落書き」を「問題行動」ではなくて、その人の「ニーズ」と捉えるんだな…そういう発想を私にはできただろうか…その行動をいかにして辞めさせるか…そう考えるのではないかと思いました。

本人の生活の安定を考え、そこまでできるのは技術や方法の問題ではなく、発想や価値観がとても重要なのだらうと感じました。

その人が描く落書きは、当初は殴り書きのような荒々しさであったものが、最近では描いたものに顔の輪郭や目がついて人を描いているような優しいタッチの絵になっています。

もちろん、日本では難しい面もたくさんあると思います。しかし、そのような発想や価値観が素直に素敵だな…と感じた自分がいました。うまく言えませんが、それがスタートなんだろうと…そう思います。

今回の視察研修は、私にとって自閉症の文化を学ぶよいスタートとなりました。また必ずノースカロライナへ行って勉強をしたい。そう思わせてくれる内容でした。本当に行って良かったです!!

表紙のことば：実りの秋を感謝して

(横浜市西区みなとみらい)

<撮影> 岡本 吉弘

# 川崎市子どもの権利に関する 実態・意識調査の概要

平成24年3月に川崎市／川崎市子どもの権利委員会（委員長＝野村武司獨協大学法科大学院教授）は、子ども調査（2400人）、大人一般調査（1000人）、施設職員調査（500人）の3つの調査で構成される「子どもの権利に関する実態・意識調査報告書」を発表しました。ここでは子ども調査の中から子ども自身の意識や思いを伺える部分を紹介します。（広報委員会）

## ▶子ども調査の概要

調査期間は2011年3月。子ども調査は3つの年齢構成で各800人に調査票が郵送され、回収数は①小学生11～12歳（459人）②中学生13～15歳（381人）③高校生16～17歳（270人）で有効回答数は平均46%でした。

## ▶いじめられたことはありますか？

全体で「ある2.6%」「ときどきある6.4%」で合計9%でした。一方大人に「子どものいじめに気がついたことがあるか？」の回答（ある、ときどきある）は15%前後でした。

## ▶学校の勉強はよくわかるか？

「わかる」+「だいたいわかる」の合計は①小学生50.8+39.9=90.7%、②中学生26.5+55.1=81.6%、③高校生17.4+58.1=75.5%で、「わからない、あまりわからない」は年齢が上がるにつれて増加傾向にありました。

## ▶自己肯定感と守られている感覚

「自分のことが好きか？」との問いに「好き・大好き」と答えた子どもは①小学生78.6%、②中学生68.2%、③高校生55.2%でした。「親や大人から大切にされているか？」との問いに「されている」と回答した子どもは①小学生95.5%、②中学生91.6%、③高校生89.6%と、自己肯定感よりも守られている感覚の方が高い数字になっていました。

## ▶最も大切な権利は？

川崎市は全国に先駆けて「子どもの権利条約」（平成13年4月）を定め、市民に啓発している自治体です。そこに示されている7つの権利について「最も重要と思われる権利は何か？」を聞きました。その結果と自由回答例は以下のとおりです。

1. 安心して生きる権利68%（安心して楽しく遊べる場所、勉強できる場所、スポーツできる場所をつくり子どもを伸び伸びと生活させてあげること。13歳）
2. ありのままの自分でいる権利43%（子どもを子どもの枠にはめず、個人として見る学校、地域を作ってほしい。14歳）
3. 自分を豊かにし力づけられる権利28%（沢山遊び自分の考えを持ち人と話し親から大切にされ大人から守られ勉強をし、命を大切にし、世界のことを知る。11歳）
4. 自分でできる権利22%（失敗を認めてほしいし答えを押し付けないでほしい。15歳）
5. 自分を守り守られる権利17%（大人は子どもを守り、同じように先輩は後輩を守る。13歳）
6. 個別の支援をうける権利10%（不登校でも差別されない社会づくりを。14歳）
7. 参加する権利7%（団結の場を増やす。協力しあえてみんなで感動しあえる機会がもっとほしい。13歳）

## ▶大人への意見

- ◇ お父さん、お母さんが仕事から早く帰ってきて、なるべく子どもを一人にしないこと（11歳）
- ◇ 子どもが夢を持って大人になれる社会を作ってほしい（11歳）
- ◇ 大人、学校の先生が子どもの意見を聞かずに一方的に怒らないでほしい。ちゃんと子どもの心を理解し話を聞いてほしい（12歳）
- ◇ 子どものことを考えているふりをして自分の利益しか考えていない大人が多いなと思います…。（14歳）
- ◇ 親から虐待を受けている子どもをなくすこと（15歳）
- ◇ 大人は子どもに圧力をかけすぎず、でも叱るときはしっかりと叱り、困っている時は相談にのってあげることが大切。（15歳）
- ◇ 子どもが安心して前に親である大人が余裕をもって暮らしていけるような社会にすべきです。（17歳）

# 地域訓練会の現状と課題、今後の方向性

横浜障害児を守る連絡協議会副会長 土山 由巳

## 横浜障害児を守る連絡協議会とは

障害のある子どもの権利を守り、誰もが当たり前前に地域で暮らせることを願って、昭和48年（1973年）より活動しています。障害の種類も年齢も様々な、主に知的障害のある子どもを持つ親の会の連絡会で、会員数約1,000名です。障害児地域訓練会という子ども自身の活動の場を持っている会もあります。親の会同志の交流を図り、問題点の解決に向けて、保育就学部会、学校部会、青年部会、成人部会、協力者部会とそれぞれの部会で、情報交換会、先輩お母さんの話、横浜市健康福祉局・こども青少年局・教育委員会等との話し合いなどの活動をしています。

## 地域訓練会とは

地域訓練会は、幼児から高校まで様々な障害のある子どもたちが、各地域で幼児は保育、学童は体操、絵画、水泳、宿泊等生活訓練などの活動を、協力者（ボランティア）の支援を得ながら、親たちが自主的に運営しています。

今年23歳になった息子も、3歳の頃より18歳まで活動に参加して、年齢に応じて保育、体操、水泳、習字、協力者との外出等々経験してきました。今振り返ってみて、この経験と学習の積み重ねが息子の成長の源だと感じております。同時に私自身を障害のある子の親として育ててくれたのも訓練会でした。訓練会の運営を先輩お母さんから引き継ぎ教えてもらいながら、障害のある子を育てる戸惑いや悩みを共有したり、子どもの成長を喜びあうことができる仲間づくりの貴重な場所でした。また、社会や地域の人々に理解してもらう啓発活動の場という大切な側面も持っています。

## 地域訓練会の誕生と役割

横浜市では1970年代、障害のある子どもの親たちが「子どもたちがいっしょに遊べる場を、親

同士が悩みを打ち明け、励ましあえる場をつくらう」と声を上げ、活動場所や協力者探し、資金確保に動き出し地域訓練会を創り、行政の理解を求めて働きかけ、市からの運営費助成も制度化されました。地域訓練会が誕生した時は7団体でしたが、平成2年（1990年）には70団体にまで増加しました。その後、市内には療育センターが整備され、幼稚園や保育園の受け入れも進み、地域訓練会の役割も変わってきました。現在では仲間同士で相談できるピアカウンセリングの場であったり、先輩のお母さん方から生活の知恵を教わる場ともなっています。そして地域の協力者の皆さんに見守られ支えていただきながら地域で活動しています。

## 現状と課題

地域訓練会は、まさに各々の地域で活動する訳ですから、その地域の療育センターの法人による運営に違いがあり、その影響も大きいと思われます。市内全域に整備されるまで時間差があり、各地域事情により訓練会の個性ができたように思います。健診等で発達の遅れを指摘されても、初診を受けるまで待機が長いと不安になり、訓練会につながるケースも多く、定員により入会待機もあるようです。未整備期間が長かった地域の方が訓練会が活発だったり、一方で待機期間が短かったり、早い時期に療育センターが整備され幼稚園や保育園に巡回に出るなど連携がうまくいくと受け入れも良く、訓練会が弱い地域もあります。

現状から見える課題として会員数の減少があげられます。幼児訓練会においては何とか安定しているものの、就園と同時に短期間で退会する傾向も見受けられます。長く続けてこそ仲間づくりや地域の中で生きていく力をつけるなど、メリットの多い訓練会なので残念です。学童の会員はかなり減少しています。放課後の社会資源が整備され

てきたことや、幼児では母子分離のプログラムが多かったのが、学齢期では親子でのプログラムが多くなるのが要因として考えられます。

療育センターや医療、施設等、関係機関の心優しき支援者の方々は、子どもの障害を告げられて、不安でいっぱいのお母さんに「無理はしないでね」「福祉サービスを利用すればいいからね」と親切に言ってくださっているのかもしれませんが。地域により差があるかもしれませんが、訓練会はお母さんが大変だから紹介しないという声や、本人が混乱するからやめた方が良くないなどという声も聞こえてきました。

確かに、親が自主運営していくためには仕事の担い手が必要で、大変なこともあります。それ以上に得るものが大きく、やってみないとわかりません。家族支援が強すぎると丸抱えになり、親の力をつける妨げになる場合もあります。また、愛着形成が大切な時期に福祉サービスを利用しすぎると、かえって子どもの大変さが目に付き、負のスパイラルに陥る懸念もあります。23歳まで息子を育てて感じることは、年齢が上がるほど社会資源は少なくなります。だからこそ難しいかもしれませんが、丁寧に対応しながらお母さんも一緒に頑張りましょうと支えて欲しいと思います。親子共に、育てる支援システムが必要だと思います。

障害は治癒しませんが、発達することで軽減します。子どもの成長を見れば、家族は安定します。療育や教育の場だけでなく、地域で生活できるように様々な体験や学習をして経験を増やして欲しいと思います。親子一緒に活動する訓練会では、子どもと向き合う良い機会がたくさんあります。構造化された家庭の中や療育の場ではわからなかった弱さも見えてきます。福祉サービスを利用していく時代だからこそ、本人が混乱しないためにも、得意なこと、苦手なことなど、子どもの姿を正しく伝えなくてはなりません。

### 協力者の役割

訓練会活動を支えてくれる協力者の存在は、大きな意義があります。良き理解者として、見守り

応援してくれる他人の存在に励まされ、認めてもらえた安心感から、親子共に自己肯定感が高まります。信頼関係も深まり、安心して相談できる存在となります。子どもと家族にとって、何より心強い存在である協力者の不足や高齢化も課題となっています。

これらの様々な課題は、生活の価値観や道徳観の多様化、核家族化、共働きの一般化、地域社会における人間関係の希薄化などの社会情勢も大きな要因であり、流れに逆らうことは難しく、これからの訓練会の方向性はなかなか定まりません。それでもけっして失ってはいけない活動であることは確かです。

### 古くて新しい訓練会

ペアレントトレーニング、ソーシャルスキルトレーニング、行動療法、感覚過敏の対応、感覚統合、ピアカウンセリング等々、専門用語を並べましたが、これらの事柄は訓練会ですべて行っているとと言えます。協力者から、子どもの可愛さや成長をたくさん褒めてもらい、褒め方や関わり方を学び、子どもの良い行動を強化できる。仲間同士のかかわりの中で、この場面ではこんな対応をしたほうが良いと、経験の中で学ぶこともできる。多くの訓練会で行われている体操や音楽療法、水泳、保育での手遊び、マッサージ、シーツブランコ等は感覚統合にぴったりのプログラムだと言えます。

訓練会は発達を伸ばすためにも有効であり、親子が共に育ち合え、仲間を作り、理解者を増やし、地域でふつうに暮らしていくことの基礎固めをしてくれました。訓練会で行っていることをもっとアピールしていく必要もあると思います。

関係機関の皆様にも、訓練会の有効性や必要性を感じていただければ幸いです。そして訓練会の状況や意義について啓発、普及のご協力をお願いいたします。

#### 横浜障害児を守る連絡協議会

email renrakukyo@hamashinren.or.jp  
URL <http://www.renrakukyo.com/>  
Tel 045 (475) 2062

# 児相一時保護所は揺籃としての確立を！

岡本 忠之（元一時保護担当・相模原児童相談所所長）

私の生き方は、前号までに書いたように、障害児であれ非行児であれ、暮らしを共にする感覚が好きなのであるから、いきなり児童相談所のケースワーカーになるかと問われても、「ノー」であった。

私の人事異動は昭和48年4月、県中央児童相談所であった。かつての上司が眼に掛けてくれたお蔭であるとのことが後に分かった。児童相談所への異動は30歳になってからであったが、知的障害施設の児童指導員であることから、児童福祉行政について分からないであろうからとの判定で、暫く一時保護所勤務を命ぜられ、職場適応すればケースワーカー、相談員の部署につけるとの命令である。

私にとって、もっけの幸いで保護所の業務をこなした。その頃は、行政の効率化から、その時まで各児童相談所には保護所機能と場所が備えられていたが、それを集約化することの発想が勧められてきていた。時代の風潮は福祉現場にいた私とて知り得ていたが、この考えには疑問を感じていた。実際赴任してみると保護所の実態は、劣悪処遇であった。24時間子ども達が入所しているのに、職員の勤務態様は定時に近い勤務であり、宿直は他県での傷害事件があったことから、女子は土・日曜日の日直業務であった。自分に関わりのある子どもが保護されていれば、一緒に散歩に出かけるが、大概、お留守番である。男子の宿直の回ってくる回数が減るように、管理事務、運転手も要員に数えられていた。全所にあった保護所を2箇所統合化を図ることで、一時保護所の体制整備を図る趣旨はレクチャーされたが、所内では配置されたくない部署と伺い、業務の中でも低く見られていた部署であったようである。

私は意に介さず、保護所の勤務についた。勤務態様を子どもが起きている時間帯は、保護所の職

員がみるという、施設では当たり前の勤務態様の変更を申し出た。私自身は鶴沼に県職員住宅があり、入所した日、不穏な時期にはいつでも加勢にできる状況を作った。宿直も管理事務の職員には辞退していただき、CW、相談員、心理士については月1～2回の実施をお願いし、保護所男子職員は、週2回を請けおった。体制固めをする中で日課の改善にも取り組んだ。

学習教材もなく、児童相談所の事務費で必要な場合は買ってくれるということであったが、心理で使う画用紙がお裾分けのように回ってくる。クレヨン、クレパス、色鉛筆、絵の具、工作用具等も揃ってなく、暮らしている子ども達への配慮が足りない。児童相談所提要には「一時保護を加え、他の機関職員と処遇検討し、よく生活の観察を行うこと。入所後2か月を超えないこと」とあるが、なかなか2か月以内で処遇方針が示されないことが多くある。子ども達の教育権はどのように考えるか。進学のある子どもに対して、管内の地域の学校には保護所から通わせるという強攻手段をとったことがあった。もちろんCWとも協議の上でのことであったが、所内会議では意見が沸騰した。通学手段、弁当箱はあるかなどであった。近くの教材店で改訂前のドリルを各学年に涉って相当な量を無料でいただいた。まず学習の習慣を身につけることの取り組みも行った。午前中はドリル学習。夜間に及ぶこともあった。

一時保護は、突然の電話依頼から始まる。食事、風呂、寝床の支度などである。入浴を共にする。夜食の準備をする。保護児童を職員並みに組み入れて準備をする。よく気が利くし頼りになる存在である。彼ら・彼女らとて、ちょっと前は理由はともかく入所してきたのである。したがって、自分たちの受け入れを反芻するがごとく、良くしてくれた。入所してくる子ども達の理解は深く、兄弟姉妹関係の様でもあった。私は入浴と一緒に入

り、傷がないか、洗髪を手伝いながら入所前の生活状態を見出すこともしながら、まずは一緒に入ることによって安心を与えたかった。浴槽ではタオルによる金魚づくり、洗面器を沈めてオナラ爆弾などの遊びで笑顔を見出す。女子も小学低学年までは一緒に入った。

親の疾病を理由とした子はわきまえており、実に良い子である。事件で急に引き裂かれる子は意外と淡々としていた。韓国籍の子で引き離された幼子は泣き止まないし、誰を求めて泣いているかも分からず、背中に背負いながら泣き疲れを待って、藤沢から江ノ島への通りを歩いた。韓国の焼肉屋を見つけ、店主に通訳をしてもらい、安心してこのお兄さんと一緒に暮らすことの安全を話してもらった。暫く保護していることで生活にも慣れ、特別野外教育として、焼肉を食べに連れて行った思い出がある。

「不純異性交遊」に対して、地域からの分離をはかる一時保護も大きな目的であった。多発している地域から一人一人抜いてみても意味があるかと疑問を呈したところ、保護所の力量を慮って保護の制限をしていることの所内会議であった。先遣隊を先ず保護して帰したところ、まとめて入所受け入れをしたことがあった。小さい子達が寝入ると事務所に来てひとしきりしゃべっていく。エゲツナイ暴行の数々も聴きながら、大人としての判断を加え、自己を律することを諭していく談義は丁々発止でもあった。

体力的に発散したいことも見出し、公園近くでのランニングも日課に加わった。片瀬山のロッククライミング的な歩行。江ノ島海岸でのTシャツ着たまま波にぶん投げる等はその後の日課もスッキリ顔で乗ってくる。やや非行系の男子とは、江ノ島下りの筏作り、中庭では手作りバターでのゴルフ練習。子ども達の遊びを見ながら、視線を追うとU字溝近くに隠していた隠し金を見つけ出したり、スリルに富んだ日課でもあった。

一時保護所が見下げられた地位にあることから、横浜、川崎も含めた研究会を開催した。各所の取り組みも相互に刺激され、楽しい会であった。施設入所の折りには、保護記録も携え、担当者の一

員として同行することとした。各施設の職員の特徴、趣味なども聞き出しておき、入所への足がかりとなる話合いに有効であった。その後、国府実修学校（現おおいそ学園）に赴任となったが、頑なに入所を拒んでいた子と“俺もその後に異動していくから”の約束があり、朝礼で挨拶すると拍手で迎えられた。

次に、平成5年に相模原児童相談所に所長として赴任。相模原は「県立身体障害者療護施設」に勤務したこともあり、市社協、市役所、家庭裁判所等との関わりを持っていたことで、古巣に帰った思いがあった。主任児童委員制度が発足し、民生委員協議会とはその調整と仕事の遂行が当初の仕事となった。児童虐待も顕在化し、一時保護を委託した児相（相模原児相は厚木児相を利用することとなっていた）から連れ出され、警察にも協力をいただき、民生委員ほか近隣住民、商店にも身柄の確保に協力をいただいた。CWには毎日のケース宅への連絡、張り紙等を毎日行わせ、5時過ぎには私も近所廻りをした。特にケースの祖父母宅には連絡が入ると狙いを決め、訪問をした。逃亡から1週間後に本児を連れて自首してきた。粘りに負けたと言ったとか。守るべき十箇条を作成し、約束状とした。CWには赤い糸で結ばれていることを示し続けろと激励してきた。

家庭裁判所が相模原にあり、私自身が非行系に関心のあることもあり、調査官をよく訪ねていた。当時、「親権が圧倒的に強く、児福法では効力が及ばなかった」ことに対する対抗手段は家裁の判断を仰ぐことであった。取り扱われたケースを閲覧させていただき、申請文等も参考に、保護者の責任を糾弾する姿勢を持った。調査官は自身が抱えているケースも披瀝して、もう少し早く児相が手がけてくれたらという嘆きを聴き入れながら、関係者間の連携の必要性を痛感した覚えがある。

児相職員には、正義感と人情味を併せ持った人材が必要であることを伝えたい。措置という公権力を持っているが、子ども達が暮らしていく上で福祉事務所、施設との連携、理解が必要であろう。

(完)

# 宮前ドルフィンと仲間たち ～障害者スポーツ水泳～

宮前ドルフィンコーチ 稗田 律子



かざぐるまの原稿依頼をいただき、「宮前ドルフィン」という障害者水泳チームの活動、指導等を書き、少しでも多くの親子が障害者スポーツに興味を持ち楽しんでもらえたらと思い、お引き受けしました。

私自身は水泳コーチを始めて30年になりました。娘が始めた水泳が楽しそうで自分でも泳ぎ始めたのですが、息子が心臓の手術を受ける時に多くの人に助けをもらうことになり、「恩返し」の気持ちで障害者のコーチになることを決意しました。

宮前スイミングスクール、横浜ラポール、横浜国際プール等、それぞれの練習場で障害児水泳の指導をしてきましたが、泳力別に練習ができるようチームを編成し、8年前に「宮前ドルフィン」が誕生。生徒総数100名で指導者数名、ボランティアさんの力を借りて頑張っています。



## 宮前ドルフィンと仲間たち

宮前ドルフィンは障害者水泳を通して社会に出て行くために必要なマナー、ルールを身につけていける様に頑張っている集団です。宮前ドルフィンの他に指導者が同じチームがありますので、一緒に紹介します。

＜宮前ドルフィン長距離組＞ 17～23歳 15名、自閉症。INS世界大会、日本選手権（知的）、ジャパンパラリンピック等に出場。世界大会出場経験者、メダリストや日本記録保持者がいるチームで、2時間の練習で4,500mほど泳ぎます。健常者の大会にも参加し、メダルゲットしています。

＜宮前ドルフィン短距離組＞ 12～42歳 14名、自閉症。日本選手権、ジャパンパラリンピックに出場し、日本の大会で頑張って上を目指しています。長距離組ほど練習は厳しくありませんが、それでも2時間で3,500mは泳ぎます。学生が多いのでこれから楽しみなチームです。

＜宮前ドルフィン身体組＞ 6～34歳 10名。ジャパンパラリンピック、日本選手権等出場。身体組には多肢欠損、四肢まひ、高次脳機能障害、聴覚障害の生徒がいます。障害としては重度ですが、とても前向きで自分の欠点もカバーして泳ぎます。

凄い精神力です。

＜宮前ポテト＞＜ムサシ＞ ポテトは6～14歳 33名、ムサシは17～25歳 10名。地域の大会、記録会出場。宮前ポテトの生徒はきちんと待って順番等を集団の中で覚えて練習をし、全員が2種目以上泳ぎます。

＜つばさの会＞ 6～12歳 20名、視覚障害。ライトセンターの短期教室受講者の親が作ったチーム。障害の重さもいろいろですが、1つのクラスは全員でビート板キックを流して練習できるまでになり、クロールが25m泳げる生徒も出てきました。



## 水泳を通してやれること

宮前ドルフィンの水泳指導の重点目標は「あいさつ」「着替え」「待つ」「聞く」「見る」「順番」を一人でできるように指導していくこと。水泳と関係ないのでは？という人がいるかもしれませんが、とても大事なことです。宮前ドルフィンはカルチャースクールではなく、生徒が自力で水泳の練習に参加ができることが目標です。水泳が速く上手でも「あいさつができない」「順番が守れない」「座ってられない」、それはスイマーとして私たちのチームではダメです。

宮前ドルフィンには障害が重度の生徒が多くいます。最初は親が子どものことを「できない」「やれない」と思い、いろいろな所に手伝い、子どもがやらなくてよいようにしていました。時間はかかりましたが、身の回りのことを一人でできるようになりました。時にはコーチの厳しい指導を聞きながら、親も子も頑張り、できることを増やしていきました。皆が一つひとつ重ねることの大切さを感じてわかってほしいと思っています。

私たちコーチが指導してきてわかったことがあります。「待つこと」ができると「見ること」ができる、「見ること」ができると「やること」ができる。これは子どものことですが、親も同じです。子どもが頑張っている着替えなどしている時、「見て」「待つ」、我慢！親の我慢です。

水泳に関しても自分の「順番」を「待つ」、コー

チの指示を「見る」「聞く」、そして泳ぎを覚える。宮前ドルフィンの生徒は小さい生徒でも自分でプールの受付に行き、「あいさつ」をして、体操が始まるまで「座って待って」いますが、その場には親はいません。他の団体の方は私たちの生徒を見て「ずいぶん障害が軽い子どもたちだね」と言われますが、重度障害の子どもが半分いて、きちんと座っていることが軽度に見られたのだと嬉しくなりました。

また、プールに入る前の体操も、一人の体操のできる生徒を見ながら全員で体操をします。コーチはできない生徒にできる生徒を見るように声かけする。コーチがやるのは簡単ですが、自分たちだけでやれることが大事だと考えています。このような指導が良いかはいろいろな意見があるかと思いますが、宮前ドルフィンコーチとして良いと信じて指導しています。



### 楽しい言葉遊び

宮前ドルフィンの水泳指導は言葉遊びです。水泳の種目にはクロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライの4種目あります。クロールの場合、水の中に手を入れる時に「サクサク」と、背泳ぎの場合に手を速く回してほしい時は「グルグル」と、平泳ぎの手をかくて前に出すタイミングは「まる前」、バタフライの手を回すタイミングを取る時に「ぐるりん前」と言うと、大体できてきます。当然、泳ぎの形を見せながら言葉をさがします。多分、宮前ドルフィンでしか通用しない言葉かもしれませんが…。

言葉さがして楽しいことを何点か紹介します。

女の子17歳。きれい、可愛い、足が細い等の言葉が大好きな生徒がいます。泳ぎは上手で速いのですが、バタ足が遅いので「もう少しキックを頑張ったら足が細くなってもっと可愛くなるよ」の言葉でキックを頑張ります。

男の子21歳。飛び込みが下手でしたが、ウルトラマンが大好きなので「ヨーイ、ウルトラマンシュワッチ」と言ったら、なんと嘘みたいに飛び込みました。

もう一人、男の子6歳、ビート板キックをしなくて困っていましたが、電車が大好きなのを思い出し始発駅から終点まで駅名を言い続け、バタ足で最後まで行きました。

一人ひとり好きな言葉、興味のある物があります。その言葉で押したり引いたりして水泳を上手に泳ぐようにしていくことも楽しみの一つです。



あっ！見つけた！その瞬間が指導者の喜びと幸せを感じます。



### 先輩ママから後輩ママへ

宮前ドルフィン、宮前ポテトのチームは親たちの交流会を年1回行っています。小学生の親から「学校、行動面」、中学生の親から「思春期、進学」、高校生の親からは「就職」など、多くの悩みを先輩ママからのアドバイスを聞き、助かっています。

この水泳チームを通して親同士慰め合う仲間ではなく、お互いに成長させる仲間であってほしいと思っています。【思うようにならぬ相手によって人間は磨かれ進歩向上していく】



### これからの宮前ドルフィン

宮前ドルフィンと仲間たちはこれからも奢ることなく1歩1歩地道にそれぞれの目標に向かって頑張り、少しでも多くの人に可愛がってもらえる集団でありたいと思います。また色々な方のサポートに感謝し、いつか私たちもサポートできるように努力していきます。

#### 〈最近の宮前ドルフィンの成績〉

- 2011年・INAS-FID グローバル世界大会（イタリア）1名、メダル3個
- 2012年・日本知的障害者短水路選手権
  - 100mフリーリレー優勝、100mメドレーリレー優勝、200mフリーリレー優勝
  - ・日本知的障害者水泳選手
    - 200mフリーリレー優勝、200mメドレーリレー優勝
  - ・日本記録保持者多数、個人のメダル多数
  - ・ジャパンパラリンピック出場者 知的12名、身体1名
- 2009～2011年・INS-FID グローバル世界大会他
  - 6名 メダル多数

## わが子の巣立ちを見守って⑥9

## 幸せな子に

上原 ひさ乃（横浜市）

我が家の長男大毅に障害があると分かったとき、障害があることは可哀想なことなのかと自分に問いかけた。そして誰かが「障害があって可哀想」と思ったとしても、本人が幸せなら可哀想な子ではないのだから、幸せな子に育てようと思った。今年4月から社会人としての第一歩を踏み出した大毅は、温かい職場に恵まれ毎日楽しく仕事に通っている。

## 小児療育相談センターにつながるまで

平成5年12月、予定日を2週過ぎて大毅は生まれた。羊水を飲んでいたということで産声をあげなかった。少し心配なスタートだったが、生後1年くらいは特に問題も感じていなかった。最初に育ちの違いに気づいたのは私の母だった。大毅は母にとって6人目の孫なのだが、あやしていても模倣がなく違和感があったそうだ。しかし、発達は一人ひとり違って当たり前と気にしていなかった。実際は歩き始めるのも遅く、言葉もないなど、3歳違いの姉と比べ、明らかに違っていたのだが、のんびり構えていた。それが2歳、3歳と徐々に不安になっていく。同い年の子どもが分かることが分からない。言葉が通じない、オムツもとれない…。後に担当保健師さんに伺ったら、「1歳半健診の時には気づいた。受け持っている子どもの中で1、2を争う気になる子だった」そうだ。

保健師さんのアプローチにも「大丈夫」と繰り返し、時に冷たい対応もした私に根気よく丁寧に関わってくださったおかげで、小児療育相談センターにつながる事ができ、本当に感謝している。地域療育センターが未整備だったこともあり、この時から今に至るまで一貫して診て頂いているのは何ものにも代えがたい大きな安心感がある。

早期療育グループを卒業する時、ソーシャルワーカーさんから「区の担当保健師さんが、お母さんが途中で通うのを止めてしまうかもしれないと心配していた」と聞かされた。それくらい子どもの状態を分かっていない親だった。半年間通って、ようやく大毅の遅れを認め、この後どうするかか問には迷わず「地域訓練会に入ります」と返事をした。

## 地域訓練会

高等部卒業まで所属していた訓練会は、大毅と私にとって大切な場所になった。通い始めたころ、協力者さんからは子どもへの働きかけ方を教わった。家では食べないケーキを食べる場面で「うちの子食べられません」と言う私に「大丈夫よ」と優しく少しずつ食べさせてくれて、根気よく丁寧に促すことでできることが増えることを教えてくださった。体操で跳び箱から飛び降りた大毅に『できて当たり前』という顔で接していた私に「もっと嬉しい顔をして褒めてあげて」と声をかけていただき、本人の気持ちに寄り添うことの大切さを教わった。

訓練会を見学したとき、「うちの子、障害児なんですわね」と泣いた私に寄り添い、励ましてくださった協力者の方には、今でもお世話になっている。大毅の成長を地域で見守ってくださるかけがえのない存在である。母親仲間も子育ての大きな支えだった。会の運営は苦労も多いが、辛いことも嬉しいことも話し合える仲間とはこれからもずっと付き合っていきたいと思う。

大毅にとっても訓練会は、気持ちを育て、安定させる大切な場所だった。訓練会で起こすトラブルによって本人が解決しなければいけない課題に気づき、様々な経験を重ねることで成長した。活動を楽しみ、年長者として頼りにされることで自尊心も生まれた。学校以外に行く場所があって、いつものメンバーがいるということが、こんなにも生活を豊かにするのだと改めて訓練会の存在をありがたく思う。

## 保育園

訓練会の保育部に半年通い、家の近くの保育園に障害児枠で入園した。訓練会のおかげで集団には大分慣れていたが、言葉はやっと2語程度。人を引っ掻いたり、噛みついたりという行動に悩まされていた。お迎えに行くたびに引っ掻き傷をつけた子が増えていき、入園当初はあやまってばかりいた。そんな時、褒められたのが挨拶である。限定した場面での言葉なら話せるかもしれないと、

「おはよう」「こんにちは」「さようなら」は母の真似をして覚えられるようにした。散歩に行くと、町行く人に挨拶するので、他の子も続いて挨拶をして、みんなに喜ばれると言われた。挨拶ができることは大人になっても大切なことだと支援者の方にも言われて実践したのだが、本当にそのとおりだと実感している。少しずつ言葉も増え、友だちとの関わりも楽しめるようになって、ゆっくりだが確実に成長し、もう少し保育園にいたいと思いつつ卒園を迎えた。



訓練会保育部お別れ会



出勤前にパチリ！

## 小学校から中学校

小学校入学前に、養護教育総合センターに相談に行ったところ、個別級が適当との判断だったが、校長先生と話し合い、情緒障害通級指導教室を利用しながら普通級でスタートすることになった。しかし、本人にはかなり辛いこともあったようだ。

最近、昔のことを振り返るアンケートに答える機会があったのだが、小学校時代だけ「楽しくなかった」という選択肢を選んでいて、最初から個別支援学級を選んでいたら違う結果だったかもしれない。進路や居場所を選ぶのはいつも悩む。あの時こうしていればと思うこともあるが、選んだ以上そこでベストを尽くせば良いし、ここは違うと思った所で方向を変えれば良いと思っている。通級の専門的な指導のおかげで課題も少しずつ直っていった。

3年夏休みに通級の宿泊学習を最後に、夏休み明けから個別支援学級に移った。交流級でからかわれることもあったが、個別支援学級をベースとしながら、交流級も自分のクラスという意識を持って毎日学校に通ったことは大きな力となっている。小学校の卒業式が終わり、二人で帰宅している途中で、地域の知り合いの方が、私たちが親子だと気づいて「あなたのお子さんだったの。毎日帰日も挨拶してくれたのはこの子だけだったよ」と言ってくださった。6年間見守り、挨拶を交わしてくださったことに温かい気持ちになった。

中学校は個別級での授業が中心で同年代の仲間も増えた。本人の力を生かしつつ将来の自立に向けて様々な技術を身につけることもでき、交流級で参加する合唱祭では、2年連続優勝と嬉しい思い出もできた。

## 高等部進学そして就労

高等部は二つ橋高等特別支援学校に進学した。バスケットボール部に所属して汗を流し、学習発表会ではピアノ演奏を披露するなど、就労に向けて厳しい指導を受けながらも、楽しい学校生活を送った。就労先の希望は職種より障害に理解がある職場であることを重視したいと先生にお伝えした。1年生、2年生と体験実習をして一番良い評価が、『大きな声で挨拶ができること』だった。保育園や小学校の時に褒められた挨拶がここで役に立った。

3年生の現場実習は前、後期とも現在の職場で、障害児の実習は初めてとのことだったが、最初から温かく迎えていただいた。前期実習が終わった時に、職場の皆さんが書いてくださったサイン帳は本人の宝物になっている。実習中に新婚旅行に出発する社員さんに、旅行から戻ってきたときには、自分は実習期間が終わっていて会えないからと、お礼と結婚祝いのメッセージを渡したこともあった。知らない間に、そんな気持ちが育っていたのだと驚いた。卒業後、就労支援センターに登録する時には面接の中で「うちの会社」と話したくらい学校から会社への移行はスムーズで、4月から今まで充実した毎日を送っている。進路担当の先生方には、本人に合った就労をさせていただいたことを本当に感謝している。

大毅が社会に出て働いている。昔を思うと夢のようである。今があるのも、私たち親子を支えてくださったたくさんの方のおかげである。今、彼は可哀想な子には見えない。まだまだ先は長く、いろいろなことがあると思うが、これからも幸せを掴めるよう見守っていきたい。

## 『平和をつくった世界の20人』

ケン・ベラー、ヘザー・チェイス 著

作間 和子 訳

(岩波ジュニア新書 ¥882)

2009年に米国で出版された『Great peacemakers』の邦訳です。ヘンリー・D・ソロー、マハトマ・ガンディー、キング牧師、ドライ・ラマ、レイチェル・カーソン、ティク・ナット・ハン、アンデルソン・サー…。紛争解決や平和運動に身を捧げた20人を選び、その業績を紹介した本です。

ソロー(米国)はハーバード大学を卒業後、教師になったものの生徒に体罰を与えるよう命令されたため2週間をやめてしまいました。その後、逮捕され牢獄に入れられます。奴隷制を廃止しない政府への納税を拒否したためでした。牢屋にやってきた友人から「ヘンリー、どうして君はここにいるんだ？」と聞かれて「なぜあなたはここにいるのか？」と答えました。ソローはいくつかのエッセイを残しました。「わたしたちはまず人間であるべきで、国に従うのは二の次だ」(「一市民の反抗」)は世界中の人権活動家を支えています。

ガンディーとキング牧師もソローの言葉に支えられたといいます。キング牧師はモントゴメリー行進の時、参加者にこう呼びかけました。「もし殴られたときに仕返しせずにはいられないなら、行進に加わらないでください。もし非暴力運動に賛同して仕返しをしない覚悟があるならこの国を救うために何かをなしえるかもしれません」。

珠玉の言葉が紹介されているのも本書の魅力です。▲偉大な国家とは苦しむ者に憐れみ深い国家です(キング)▲私は深刻な紛争の時代に平和のみが私の国を存続可能にする唯一の選択肢だと思われる時代に大統領になったのだ(オスカル・アリエス)▲一見解決不可能にみえる問題はすべてその大半が恐れによって生じています(ブルーノ・フッサール)。(武居光)

## 『思春期の精神科面接ライブ

～こころの診察室から』

井原 裕 著

(星和書店 ¥1,995)

このひと月、偶然手にした小説(文庫本)に精神医療に関わりのあるものが続きました。精神科医の春日武彦『緘黙～五百頭病院特命ファイル』(新潮文庫)、フリー編集者の天野作市『みんなの旅行』(講談社文庫)、元映画スタッフの高野和明『幽霊人命救助隊』(文春文庫)。主人公の視点は精神科医、患者、自殺する人を救う幽霊、とさまざまですが、私の目からはどれも「心を病む人」の設定や描写に無理がなく、エンターテインメントとしても楽しめて、特に『みんなの旅行』はお勧めです。以上、前説終了。

本書は書名のとおり診察室での患者さん、ご家族、精神科医の著者のやりとりを全編会話体で再現を試みたものです。実在する患者さんそのままではなく、あくまで「リストカットにて精神科通院3カ所目の16歳女性(症例1)」が診察室にあらわれたとしたら…です。基本的には専門家向けですが、著者は一般読者、著者の担当患者さん、思春期の皆さんと親御さんも想定していて、対話記録の欄外には丁寧な脚注と、症例ごとに短い診療録 Assessment & Plan が付けられており、より深く理解できます。面接の極意といったことも書かれて仕事にも役立ちそうです。

「お待たせしました」から「お大事に」までの対話記録ですから、診療内容とともに人間性も見え、読者の好き・嫌いも出やすい、まさにライブです。著者いわく「エンターテインメントではありませんが、もし、おもしろく読んでいただけたら、それは私にとってうれしいことです」。

(白楽李白)

**あとがき** 最近では少々境目が怪しくなりつつありますが、日本には四季があります。特に今の季節は、北海道で初雪の便りが届く一方で、沖縄や小笠原では真夏を記録することも珍しくありません。日本は広く、そして多様であることを感じます▼今年の夏に研修会で福祉サービスのお話をしていたら、ある親御さんが「障害福祉の分野には四季の概念がないのか」という問いを投げかけてくださいました。私もそこでハッとしたのですが、確かにこれまで四季の移り変わ

りと支援のあり方へ注意を向けたことは少なかったように思います。しかし、支援のベースは同じであっても、四季がある以上、その表し方は通年同じというわけではないはずです。身に付ける1つ取っても、夏と冬では大違いですから▼支援の多様性と四季(季節)の多様性・考えてみれば当然のことなのですが、改めて大きなテーマをいただきました。夏休みはとうに過ぎていますが、宿題はまだ提出できていません。

(又村あおい)

発行：神奈川県保健福祉局  
福祉・次世代育成部  
障害福祉課

編集：小児療育相談センター  
広報委員会

身近なニュース、活動報告、その他ご意見感想、素朴な疑問などをお寄せください。

<宛先> 〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川1-9-1

小児療育相談センター 広報委員会

TEL:045-321-1721 FAX:045-321-3037

Eメール: shoniryoiku@aitori-net.com

バックナンバーをホームページでご覧いただけます。

[http://www.aitori-y.jp/11\\_magazine.html](http://www.aitori-y.jp/11_magazine.html)